

## 私の歩んだ脈管学会の半世紀

田辺 達三

第 50 回総会特別企画「日本脈管学会 50 年をふりかえって」の担当を重松 宏会長から指名され、脈管学の発展史について講演する機会に恵まれた。過去を語る手元の資料から脈管学会の今昔を振り返ってみた。

### 学会発足当初の雰囲気

発足当時の本学会は時流になっていた独立専門学会と違って、基礎と臨床の医学研究者が一堂に会し、幅広い学際的な発表で活気溢れる熱気が漲っていた。初代会長の西丸和義先生は先頭に立って実証主義を説かれ、留学時代に師事したケンブリッジ大学の生理学者フォスターが教えた「See and do」「Don't think too much」を折に触れて熱心に語りかけられた。メモや手荷物につながる多数の鎖をボタンに掛けて忙しく活動された先生の面影が印象深い。その頃先生からハーヴェイの血液循環(岩波文庫版)の著書を頂き、感激した個人的な思い出もある(Fig. 1)。

第 2 代会長の石川浩一先生は学会創設時から本会の発展に尽くされた。常に真摯な学究的姿勢でわが国に特異な血管病の研究で学会をリードされたが、ピュルガー病についてはご自身の体験からこの病気の成因の解明を強く要望された。第 30 回総会での記念講演「日本における脈管学の研究」は資料を網羅し、貴重な文献ともなった。1977 年に出版した拙著「人工血管」について、「良い本を出しましたね」という先生の賛辞は私の研究生活に大きいインパクトとなった(Fig. 2)。

多領域の研究者がともに集う本学会は示唆に富む発表が多く、最盛期には 5000 人以上も学術集會に参加し、先端的な脈管研究の輪は急速に広がった。この学会で分野の違う基礎医学、臨床医学の多くの研究者とも知己を得て交流し、研究に専門的なアドバイスを頂いたことが鮮明に蘇ってくる。

### 専門分化に伴う学会の発展

1970 年代になると学術の進展とともに専門分化が進んだが、本学会からも心臓血管外科学会、微小循環学会、血栓止血学会、リンパ学会、脳卒中学会、動脈硬化学会、血管外科学会、バイオレオロジー学会、静脈学会などが発足し、密接な関連活動が始まった(Fig. 3)。なかでも心臓血管協議会から発足した日本心臓血管外科学会は学術の進展が著しく、欧米の研究とも競って活動も盛んであった。私は 1972 年の第 1 回会合では主題・静脈移植で講演する機会を与えられたが、本学会にも脈管学会同様に毎年出席して切磋琢磨し、第 19 回総会を札幌で開催できた(Fig. 4)。またこの世界学会も世界の各地で 2 年毎に開かれ、シンポなどで参加できた。この学会では心臓血管外科学を推進された大先輩のリーダーの背中をみながら、私と同世代も負けずに頑張る心臓血管外科学の発展に尽くした。時は流れてすでに何人かがリタイアされ、また他界されており、淋しい限りである(Fig. 5)。

静脈の研究は長い間日の当たらない地味な領域とされていたが、恩師杉江三郎教授が逸早く手が付けられ、とくに外科治療に業績を重ねられた。日本静脈研究会は阪口教授らによって 1981 年にスタートしたが、1986 年には静脈学会となり、同時に国際静脈学会も京都国際会館で開催された。その懇親会で華々しく打ち上げられた花火は遅れていた静脈学のスタートを象徴付けるものであった。関 清第 3 代会長が立ち上げたリンパ学会には四肢浮腫の課題で参加したが、循環器学、免疫学、腫瘍学などの研究発表の場であり、多くの研究者と知己を得る機会にもなった(Fig. 6)。

担当した第 31 回総会では話題のテーマを主体に欲張ったプログラムを組んだが、参加者の熱心な研究発表で実り多い学会を運営できた(Fig. 7)。詳細は別稿で述べるが、その成果から「血管の病気」(岩波新書)を出版し、血管に広く関心と呼ぶことができた。

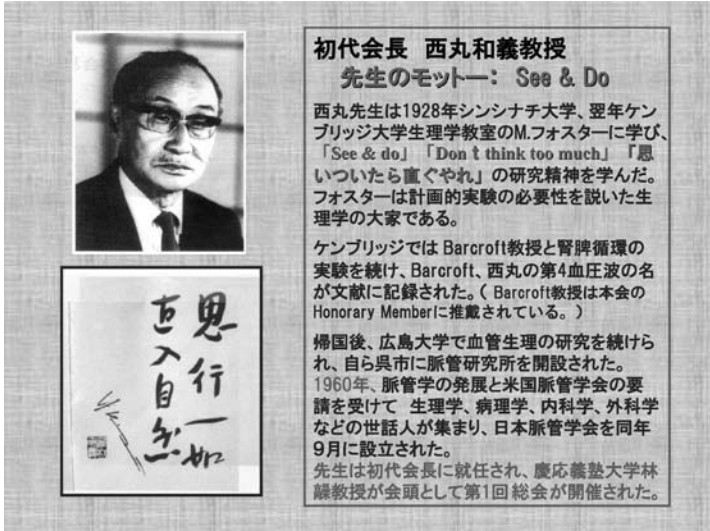


Figure 1 初代会長西丸和義先生の思い出



Figure 2 第2代会長石川浩一先生の思い出

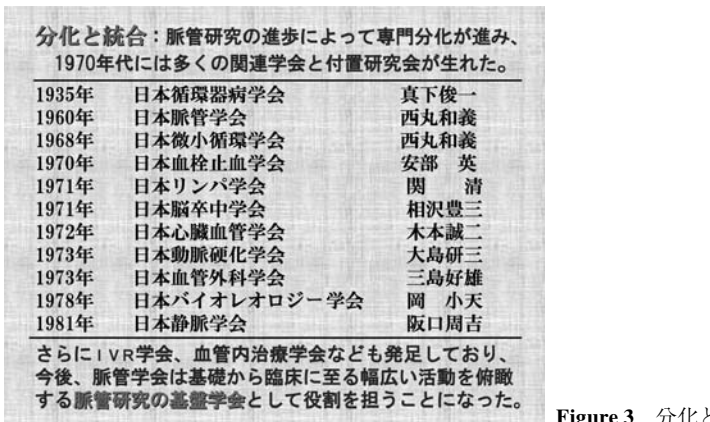


Figure 3 分化と統合

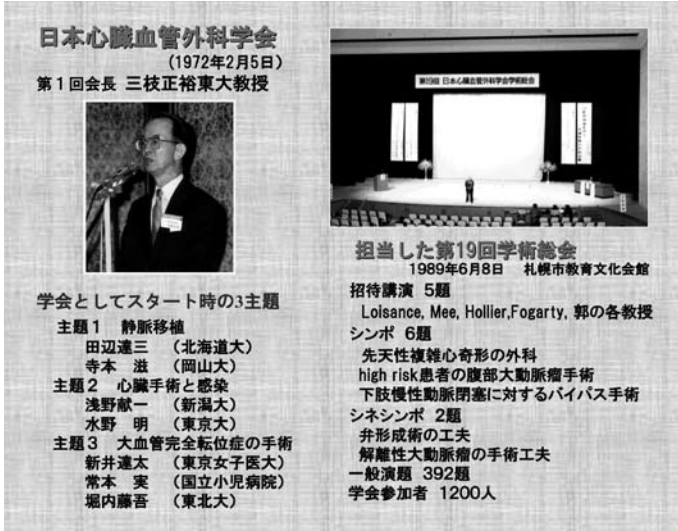


Figure 4 日本心臓血管外科学会



Figure 5 日本心臓血管外科学会の発足  
(1972年2月 ホテルニュージャパン)



Figure 6 日本リンパ学会の発足



Figure 7 広範な研究発表で賑わった学術総会 第31回日本脈管学会

全国規模の厚生省特定疾患調査研究班		
研究班名	班長	年代
ビュルガー病	石川浩一(東京大)	1973
大動脈炎症候群	福田 潔(岐阜大)	1973
系統的脈管病変	塩川優一(順天堂大)	1976
	福田芳郎(順天堂大)	1979
	三島好雄(東医歯大)	1985
難治性血管炎	田辺達三(北海道大)	1990
	長澤俊彦(杏林大)	1993
	橋本博史(順天堂大)	1996
	尾崎承一(聖マリアンヌ医大)	2002
	榎野博史(岡山大)	2008

研究目的	<b>共同研究体制→エビデンス→ガイドライン作成</b>
	1 基礎医学の研究成果を導入し、病因を追及する。
	2 基礎と臨床の共同で病態解明と診断・治療法を確立する。
	3 疫学調査、診療・予防のガイドライン・マニュアルの作成。

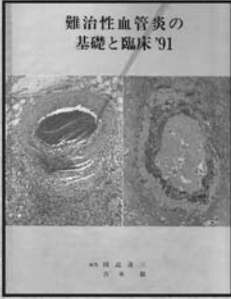
Figure 8 全国規模の厚生省特定疾患調査研究班

### 班研究など共同研究の成果

1973年に始まった厚生省特定疾患調査研究における共同研究は毎年大きい成果を挙げた。全国から代表的な研究者が集まり、ビュルガー病、大動脈炎症候群を始めとし、系統的脈管病変の成因追求、病態解明、診断治療

法の確立を目指し、エビデンスに基づいた診療ガイドライン、マニュアルを作成する研究が行われた(Fig. 8)。その後研究班は系統的脈管病変研究班、難治性血管炎研究班へと発展して今日まで続いている。私が研究班班長だった1990年からの3年には、当時盛んになった分子生物学、分子遺伝学、免疫学などの基礎医学の進歩を導

**班研究「難治性血管炎」の共同研究**



難治性血管炎の  
基礎と臨床 '91

公開シンポジウムの開催  
1991年7月 北大学術交流会館

**役割： 基礎から臨床へのトランス  
レーショナル・リサーチ**

シンポ1： 細胞接着分子、サイトカイン  
異常と血管炎(基礎医学の橋渡し)

シンポ2： 難治性血管炎の診断基準と  
治療方針(ガイドラインの作成)

**目的：**大型弾性血管炎から中小の筋型血管の血管炎について  
1. 分子生物学、分子遺伝学、免疫学など基礎医学の進歩を導入し、  
難治性血管炎の成因を解明する。2. 診断治療の難しい特殊病変を明  
らかにして、3. 早期発見や効果的な予防対策を追及する。

Figure 9 班研究「難治性血管炎」の共同研究

**班研究「難治性血管炎」の国際的活動**



Intractable Vasculitis  
Syndromes  
Edited by  
Tatsuzo Tanabe  
Hokkaido University Press  
1993

国際シンポジウムの開催  
1992年7月 北大学術交流会館

**役割： 疾患分類とクライテリア  
国際的比較 (グローバルゼーション)**

- 1 Comparative studies on criteria for classification
- 2 Pathological aspects of vasculitis syndromes
- 3 Immunological aspects of vasculitis syndromes
- 4 Clinical aspects of vasculitis syndromes
- 5 Inflammatory abdominal aortic aneurysms

**成果：**内外約100人の遺伝学、病理学、免疫学、アレルギー学な  
どの基礎医学研究者、ならびに内科学、外科学、血管外科学、  
皮膚科学などの臨床医学研究者が一堂に会して、各種血管炎の  
分類、診断基準の比較、血管炎の病理学的、免疫学的特異点、  
臨床症状、炎症性腹部大動脈瘤などについて国際的な見地から  
研究の成果をまとめ、Consensus Document作成を試みた。

Figure 10 班研究「難治性血管炎」の国際的活動

入し、1991年には血管炎の特殊病変を解明する研究成果を著作としてまとめた(Fig. 9)。進展する分子生物学などの基礎的研究に対して、臨床側からの要望を受けて研究を橋渡しする活動のはしりともなった。さらに1992年には異論の多い難治性血管炎の疾患概念や分類基準について、国際的に統一された基準が必要と考え、内外

100人の研究者の出席のもとに比較検討が行われた。その論議をまとめた報告書は新たな合意を展開する第一歩にもなった(Fig. 10)。

#### 歴代会長の貢献と学会の発展

脈管学会はリンパ学を推進された第3代の内科学

### 三島好雄名誉会長の貢献

**日本脈管学会とともに**

三島 好雄  
日本脈管学会名誉会長

（以下、本文の抜粋）

1970年代、日本脈管学会の発展を促すために、私は基礎医学と臨床医学の両分野で活躍し、学会の発展に貢献しました。特に、基礎医学の分野では、動脈硬化のメカニズムを明らかにし、臨床医学の分野では、動脈硬化の治療法を開発しました。また、学会の運営にも積極的に参加し、学会の発展に貢献しました。

2003年 脈管学 43(1):1



第五代会長稲垣義明会長の後を継いで1996年から本学会会長を務められる。

**本学会の発展に多大な功績**

三島教授は1970年代の本学会発足当時から自らの学術発表とともに、学会運営の幹事役に幅広い人脈とリーダーシップを発揮し、基礎から臨床まで広範囲の領域を包括する総合的な学会に育て上げ、日本脈管学会を最大規模の学会へと発展させる上で主要な役割を尽くした本学会の功労者である。

**論文要旨：脈管学会は基礎学会として広い視野に立って血管に関する研究を統合、整理し、幅広い領域をカバーする脈管学を体系化する役割が期待される。**

Figure 11 三島好雄名誉会長の貢献

関清教授から、異型大動脈縮窄を中心に大動脈炎症候群の研究などで活躍された第4代の外科学稲田潔会長、次いでCTやMRIなどの画像診断の導入を推進された第5代の内科学稲垣義明会長、さらに血管外科で活躍された第6代の外科学三島好雄会長へと継がれた。その後は新たに理事長制を導入し、矢崎義雄教授、重松宏教授が改革を進められたことは周知の通りである。それぞれの学会長からご厚誼を頂いたが、とくに親交を重ねた三島教授は本会の発足当初から学会運営の幹事役を務められ、幅広い人脈とリーダーシップを発揮されて多大な貢献を尽された功労者であった。1996年からは会長として本会を広範囲な領域を包括する総合学会へと発展させるうえで主要な役割を果たされた。会長辞任に当って残された「脈管学会とともに」には、学会の将来に期待する思いが述べられている(Fig. 11)。親友を失い痛恨の極みであり、偲ぶ会ではヘルマン・ヘッセのエッセイを引用した追悼文を捧げ彼の功績を偲んだ。

### 脈管学会の今後に望むこと

脈管学研究的の将来については画期的な展開が予測される。脈管学の進歩は単に分子生物学、遺伝子学、再生医学などに止まらず、生命に直結する課題に挑戦して、

21世紀の医学全般に重要な役割を果たすものとみられる。最後に本学会の発展を祈念して、ささやかな経験から私見を述べてみたい。

- ①基礎医学と臨床医学の共同研究の数少ない学会として、進展する新知見を効果的に橋渡しする。
- ②大規模研究組織を構築してエビデンスに基づく診療指針を作成し、医療の質向上に尽くす。
- ③幅広く発想を転換するために必要な研究費を獲得し、生活習慣病につながる脈管疾患の研究を推進する。
- ④国際的見地から優れた研究を支援し、先端的研究や文明病の研究などをリードする。
- ⑤20世紀の科学を推進した量子物理学、分子生物学のように、創設期に漲っていた熱意で21世紀の中心的学問として脈管学を推進して生命の根源に迫る。

学会の講演では最後に伝教大師・最澄が教える「一隅を照らす」を引用した。それは基礎と臨床両分野の研究者が各々の専門を磨き、一堂に会する学術総会で最新の成果を交流することで、本学会の創立理念が遵守されるとの考えからである。脈管学会が基幹学会として医学の発展に一層貢献するために、今後発想を転換した後生によって学会の場に新たな進展が生まれることを期待している。(別稿「示唆に富んだ学会のインパクト」を脈管学に投稿中)